前嶋先生退職に寄せて

恩人前嶋孝教授を想う。「私の座標軸」

松浪健四郎（学校法人・日本体育大学理事長）

昭和54年（1979年）4月、私は専修大学の専任講師として採用された。すぐに社会体育研究所報の編集に携わり、前嶋孝先生からご指導を受けることとなった。

深遠なる真理を探究する姿勢は群を抜いていて、凄みのある研究者という印象をもったことを今も記憶している。前嶋先生は、孤高の学究で深夜まで実験をしたりデータ整理等を日常のものとされていた。で、私も大きな影響をうけ、内心、対抗意識を燃やした。

研究ジャンルが異なろうとも、研究者の心がまえは同じだし、己に妥協しない前嶋先生は憧れの人だった。しかも、最強のスケート部を牽引しているにくわえ、メディアが注目する指導者でもあられた。

研究に、指導に殆んどの時間を費す前嶋先生は、息抜きの名人でもあられ「尺八」の修行に打ち込まれていた。ストレスの解消は、さらなる士気の高揚は、奥の深い趣味をもつことだとも教えられた。

前嶋先生の研究は、先行研究を気にせずしてオリジナリティに富む独自性の高いものであった。先生の個性のなせる業であったろうが、常人では理解できないくらい特殊な人間性は、とくに誤解を生んでいた。100分の1秒を短縮させる技術開発を狙う研究者の個性を並みの人間では理解できず、付き合いの悪い人との評価もあった。が、前嶋先生は時間を大切にされ、時間のムダを嫌う方でもあられたことを私は知っている。

スケートの不得意であった私は、数年間続けてスケート部の合宿に同行させていただき、スケートの実技向上に取り組んだことがある。前嶋先生の執念と情熱に接して、ひたすら頭を垂らすしかなかった。まれにみる純粋な人だった。だからこそ普通の人では、並みの研究者では、前嶋先生と行動を共にするのは困難だとも思えた。あの強烈な研究者の姿勢に続く人は稀に違いなかった。

前嶋先生の眼前は、「世界」であり、この「日本」ではなかった。いつもスケールの大きな発想で研究に打ち込まれていたのには感心するしかなかった。あのスケールは、風土の厳しい長野県の地で育まれたのだろうか。

専修大学で産まれた前嶋先生は、大学にとっても貴重な存在であるがゆえ、研究施設や強化施設に大金をそそがれた。私どもにすれば羨ましかったが、それが前嶋先生の実力であったのも事実だった。もちろん、多くの理解者たる先生たちもいた。

私は18年間、専修大学でお世話になったが、18年間夜学の授業を担当した。研究のために時間をかけることができたからである。与えられた環境の中で、いかに工夫して研究するか、私は前嶋先生を強く意識していた。前嶋先生の研究心は、想像以上に徹底していたのである。

第三者に対して前嶋先生は寛大であられ、悪口をたたいたり批判されたりすることもなかった。むしろ、常に応援するスタンスをとられていたので、私なども応援していただいた。海外遠征や異郷でのフィールドワークの多かった私は、いつも前嶋先生に助けられた。鋭い感性に加え、先生は独特の哲学を構築されてもいた。だから会議の席上、論議がみ合わないことも度々あったと述懐する。しかし、前嶋論はときに極論であっても真理であった。私は意外にも冷静に観察していて、最後には前嶋論に従った。

当時、研究所の中でしばしば対立があったけれど、学術的な面ではなく、少し次元の低いものだった。そんなおり、前嶋先生は発言せず多数に従う一面も見受けられた。対立に組しない円熟な人間性も尊かった。

私と前嶋先生の共通項は、研究だけに取り組むのではなく、本気になってスポーツ指導を行なったことだと自負する。私はレスリング部のチームづくりに相当な時間をかけたが、前嶋先生は世界的なスケーター育成に発狂されていた。ともかく、近寄りがたい雰囲気を漂わせていた。

二人に共通していたことは、互いに歯ぐきが病んでいた点である。現役選手時代の後遺症ともいえるものだった。前嶋先生は、虫歯を一本も持たなかったのに歯ぐきが弱いため、グラグラの歯。昼食は決まって柔らかい「うどん」を食されていた。肉よりも魚を好まれたのは歯の影響だったに違いない。ガマン強さの真骨頂、歯についての物語だけでも前嶋先生の性格が読みとれようか。

もう一つ感心させられたことがある。私たちにとっては、スキー実習、スケート実習という冬季の寒さをともなう授業は苦手で、幾枚も服を着込んで行なった。だが、前嶋先生はめっぽう寒さに強く、いつも薄手の服装だった。それほど脂肪をまとった体でもなかったのに、なぜ、あんなに寒さに強いのか、私どもには不思議だった。さすがに氷上でのキャリアを見せつけられた思い出がある。

それにしても、義理人情に厚い面をもつ前嶋先生だったけれど「悪いものは悪い！」と、いつも厳然と主張された。ときおり、仲間のなかで問題が生じた。新聞沙汰になった大問題も起こったのである。たいてい前嶋先生の意見が研究所のものとなった。学究としての見識と社会的常識のベースに判断され、私たちも面目を保ったことを忘れない。

年配の先生方もおられたが、優柔不断さに業を煮やすことも多く、建設性に乏しかったゆえ、前嶋先生は大黒柱的役割をおびておられた。先輩であられた鈴木啓三先生と真剣に相談される場面と幾度も遭遇した。もう一人、前嶋先生の学究がいたなら、研究所をさらに発展させることができたかもしれない。

体育会の各部の強化にも強烈な哲学をもたれ、卒業生らしく、母校愛を表出された。中途半端なことを好まれず、何をされるにしても徹底する性格は特筆に価するものだった。周囲の人が眉をひそめるような意見も吐くほど、先生は清廉潔白であられたのである。

他方、ご家族を大切にされる人でもあられた。寸暇を割いて長野に戻られ、そのご尊父との土産話をよく聞かせていただいた。ご尊父こそが最高の理解者で、かつスポンサーであられたことを私たちは知っていた。奥様も笑顔をたやさない立派な方で、かつての名スケーターであったことを誇らず、すべてにおいて控え目であられた。奥様の協力があってこそ、前嶋先生は前嶋先生らしく振る舞うことができたのではあるまいか。

いずれにしても、私の専修大学18年間は、前嶋孝という学究から刺

激を受ける日々だった。これほど敬愛できる、影響を与えてくれる人物と出会えたのは、私の人生にとっては幸運の一言につきる。以後、いろんな問題に直面したおり、私は「前嶋先生ならどう判断されるだろうか」と、立ち止まってよく考えることがあった。私にとって前嶋先生は、すべての面において座標軸だったのである。

前嶋先生、本当にご苦労様でした。感謝。

前嶋先生退職に寄せて

絶対に
世界の頂点を目指そう

黒岩　彰（富士急行スケート部監督）

平成23年度日本学生氷上競技選手権大会スピード部門、総合優勝おめでとうございます。歴史と伝統のある専修大学スケート部をここまで作りあげていただいた元監督、現部長である前嶋先生の定年退職に最高の贈り物が出来たことと思います。

思い起こせば32年前、私はこの専修大学に胸をときめかせ入学をした。とでも言えば前嶋先生の定年退職にもっと花を添える言葉になるであろうが、実は、私はこの入学にあまり乗り気ではなかった。それは当時、絶対的強さを誇っていた明治大学に進学が決まっていたにも関わらずシーズン間近の9月その入学を断られていたからである。そんな状況の中で専修大学に進学をするか、家業である実家の農業を継ぐか決心しきれないままその時を迎えていたのである。

しかし、入学してすぐ前嶋先生とスケート部の今後について徹底的に話し合った記憶が残っている。専修大学のスケート部は旧体制とでもいう体育会系独特の封建的な上下関係を排除し、世界で戦える日本のスポーツ界の手本になるチームを目指す。そんな大学運動部の根本を変える大革命を起こしたのである。話している中で前嶋先生は、「彰はスケートをどうのように考えている」と問いかけてきた。まだ心に迷いのあった私は多少時間をかけて、スケートを真剣にするのであれば世界の頂点を目指したい、と答えた記憶がある。

「それじゃあ絶対に世界の頂点を目指そう」と言った前嶋先生のその目は真剣そのものだった。もしかしたら専修大学で日本のスケート界を変えられる、自分はこの専修大学でスケートを続けられるかも、そう思った瞬間でもあった。

専修大学での生活は目新しいことばかりだった。前嶋先生により大革命を起こしたスケート部は、4年生は天皇1年生は奴隷的な他の部から見れば運動部の非常識、よく呼び出され小言を言われたものだった。しかし、スケート部内で共同生活をする中では頭を使う事が多かった。スケート部の部屋は二段ベッドが3つの6人部屋だった。朝目覚めた時に先輩が掃除をしている姿を見た時、自分は何をやっているのだろう、明日からは絶対に先輩に掃除をさせてはいけない、こんな事なら封建的でも指示を出してもらいマニュアル通りに1年生の仕事があった方が楽だ、と思った事もあった。

トレーニングにおいては、今まで日本のスケート界では取り入れた事も無い練習の数々、常に新しい挑戦に毎日が楽しかった。以前の日本のスケート界は諸外国の練習内容を取り寄せ2～3年遅れで実施していた。同じ線路の上で前を行く諸外国の車両を後ろから追いかけても、追い付く事はできても抜くことはできない、日本が外国の選手に勝つためには日本独自のレールを新設していく必要がある、日本人にしか出来ない技術の習得、独自の練習内容の改革が必要だと……前嶋先生は常にそう言っていた。

専修大学での1年間が終了し私はある種の確信を得ていた。大学最大の目標であるインカレでの総合初優勝、全日本スプリント選手権初優勝、初出場の世界スプリント選手権で総合6位と成績だけは納得のできるシーズンではあった。しかし、成績以外はがっかりする事が多いシーズンでもあった。それは日本のスケート界のレベルの低さ、にだった。

シーズン当初の長野合宿では他の大学から、専修大学は先輩後輩の上下関係も無くし非常識なハッピーチームだから、午前中の選手専用の時間帯では練習するな、と言われ午後の一般開放の時間で練習した事もあった。また、アジア大会の選考会である大会で私は全てのレースで優勝したにも関わらず選考されず、アジア大会に参加できないという到底納得いくスケート界ではなかった。

私は納得のいかない選考の不満を前嶋先生にぶつけたが、前嶋先生はその時「とにかく勝ち続けよう。誰もが認めざるを得ない強さをつけるしかない」その時言われた言葉で絶対に世界で勝って今のスケート界を見返してやる、メラメラと心の中に勝負の火がついた事を覚えている。

2年間で、私だけではなく専修大学の選手達は急激に力を付け日本のトップを占めるようになった。前嶋先生が言っていた誰もが認める強さを得ることができても、前嶋先生のさらに新しいトレーニング方法に挑戦する姿は変わらなかった。結果、私は大学3年次、1983年世界スプリント選手権大会で総合初優勝することが出来た。しかし、この総合優勝が翌年のサラエボ五輪の結果に連動するとは私は予想もしなかった。

サラエボ五輪までの1年間の取材攻勢は凄まじいものがあった。ある日第1体育寮で目を覚ましたら目の前にテレビカメラがあり、取材班の